

第1章 初回「治療」クリトリス吸引・Gスポット開発・ポルチオ開発・初潮吹き

期待の若手官僚、日下部玲於（27）が会議で倒れた。筆頭補佐官・轟木巖（45）は彼を保健室ではなく自分の執務室へ連れ込み、診察台に寝かせる。カルテには「インターセックス（カントボーイ）」の記載。巖は淡々と「これは治療だ」と告げ、スラックスを下ろさせた。

無影灯の下、露わになった秘所。萎縮して皮に埋もれたクリトリスと、男性の身体には本来あるはずのない完全な女性器。巖は手袋をはめ、吸引器具のカップをクリトリスに押し当てた。

「まずはここを肥大化させる。表皮が剥けるまで吸い上げるから、我慢しろ」

スイッチが入る。瞬間、強烈な陰圧が玲於の最も敏感な場所を吸い上げた。

「ひっ……！！ あゝ、あああっ！！」

クリトリスがぐんぐん肥大し、表皮が剥け、神経が剥き出しにされていく。カップの中で充血した突起がひくひくと脈打ち、クリトリスの根元から背筋を抜ける電流。尿道の奥がきゅんと疼き、膀胱にじわじわと熱が広がる。内腿を愛液が伝い落ちた。まだ吸引だけなのに、自分の身体が上司の器具で開発されていくという倒錯に、玲於の腰が浮いた。

「……う、く……っ！ これ、やめ……なに、これ……ッ！」

「どうした、もう限界か？ まだ吸引を始めたばかりだぞ。表皮が剥けて神経が露出するまで、あと十分はこのままだ」

巖はカップの吸引力を一段階上げた。吸引音が低く響き、クリトリスの先端がカップの中でさらに膨張する。

「んぐッ……！♡ あゝ、ああ……っ！ は、げし……ひっぱられ……ッ♡」

玲於の膣口から、とろりと愛液が溢れ出し、太腿を生温かく伝っていく。窄まりがひくひくと開閉し、何も挿入っていないのに何かを求めてきゅうきゅうと締まっている。巖はそれを見逃さず、指を二本、無造作に突き入れた。

「ひぎッ……！♡ あ、指……はい、って……ッ♡」

窄まりはまだ狭く、第一関節をくわえ込んだだけでひくひくと締まった。ぬるりと熱い指が奥へ進み、前壁のざらざらした部分をぐっと押し上げる。他の粘膜とは違う、少し硬い凹凸。指の腹でそこをなぞられると、玲於の腰が跳ねた。

「んっ……！♡ は、あ……ッ！ そこ、ざらざら……なに、そこ……ッ♡」

「ここがGスポットだ。尿道の裏側、ざらついてるのが自分でもわかるか。ここを押すと、尿道の奥がきゅうっと締まって、お前、すぐとろけるんだよな」

巖の長く節ばった指が、Gスポットをぐりぐりと圧迫する。尿道の奥がきゅんと疼き、我慢できない尿意にも似た快感がじわじわと膀胱に広がった。同時にクリトリスはカップで吸引され続け、玲於の視界がチカチカと点滅する。

「あゝ、ああっ……！ ちが、そこ、ちが……！ や、やめ……お願い……！」

「日下部くん。これは治療だ。拒否権はない。今日はここも開発する」

巖は容赦なく二点責めを続ける。片方の手でクリトリスを吸引し、もう片方の手でGスポットを執拗に圧迫する。玲於の腰が自分の意思とは関係なく浮き、巖の指に擦り付けてしまう。膣壁がうねり、愛液が指を伝って手のひらまで滴り落ちた。

「…っ、は……日下部くんのナカ、指だけでこんなにぐちゃぐちゃ言わせているぞ。Gスポットを押すたび、中のヒダが吸い付いてきて離そうとしない。正直な下腹部だ」

「うゝ、あ……っ！ や、やだ……たのむ……それ、もう……ッ♡」

「まだまだ。今日はもう一つ、開発する場所がある。それと一見落としていた。胸の方も診せてもらおう」

巖は玲於のシャツのボタンを外し、胸を露出させた。乳腺組織を除去した痕がうっすらと残る胸板に、小さな乳首が二つ。巖の指が左の乳首に触れた瞬間、玲於の身体がびくんと震えた。

「……ッ、あ……！そこ、は……乳首、なんて……開発、する場所じゃ……」
「男のお前でもここは性感帯だ。ましてや、お前の身体はホルモンバランスが特殊だ。乳腺組織はなくとも、乳首の神経は鋭敏に発達しているはずだ」

巖の長い指が乳首をつまみ、ぐりぐりと圧迫した。指の腹で転がされ、爪の先でカリカリと引っ掻かれると、背筋にぞくぞくと電流が走る。玲於の乳首はみるみる充血して硬く勃起し、胸全体がじんじんと熱を持った。

「あ、や……なんで、乳首、こんな……ッ……！は、あ……！乳首、弄られるだけで……下が、疼いて……ッ」
「乳首と子宮は神経が繋がっている。医学的にも証明されている反応だ。お前の身体は特にその連動が強い。ほら、ここをぎゅっと抓るとー」

巖が右の乳首を強く抓りながら、左の乳首を口に含んだ。生温かい舌が乳首の先端をちろちろと舐め、唇で吸い上げられる。同時に膣内の指がGスポットを押し上げ、玲於の視界が白く弾けた。

「んぐッ……！♡ あゝ、乳首、吸われ……ッ♡ 乳首と、Gと、いっぺんに……ッ♡ あゝ、むり……むりむり……ッ♡」

「素直だな、玲於。乳首だけでこんなに濡らして。見ろ、俺の指がぐちゅぐちゅだ」

巖は玲於の乳首から口を離し、今度は指先で両方の乳首を同時に弄り始めた。摘まみ、転がし、引っ張り、押し潰す。乳首への刺激だけで玲於の膣はきゅうきゅうと締めまり、クリトリスは吸引カップの中でさらに充血してひくひくと脈打つ。Gスポットへの圧迫が加わると、尿道の奥が疼いてたまらなくなる。

「んっ……♡ 乳首、だめ……それ、気持ちよすぎて……あ、あたま、ぼーっと……して……ッ♡」
「いいぞ、そのまま身を任せろ。乳首だけで軽く達しても構わない。これは治療だ」

「あゝ、ああッ……！乳首、で……イッ……♡ んくうッ……！♡ 乳首、イク……乳首でイッちゃ……ッ♡」

玲於の身体が大きく跳ね、膣がきゅうきゅうと痙攣した。乳首への執拗な刺激だけで小さく達してしまい、愛液が指を伝ってどろりと溢れ出る。まだ本格的な絶頂ではない。でも一乳首だけでイカされたという事実が、玲於の理性をじわじわと削っていった。

「乳首だけで軽くイったな。正直でよろしい。だが、これはまだ準備運動だ」

長い指が、Gスポットを超えて最奥へ進む。そして一軟骨のような硬い一点を、コツン、とノックした。

「——んゝ いっ♡」

内臓の奥で星が散る。これまで誰にも触れられたことのない場所。自分でも触れたことのない場所。そこを、この人の指がノックしている。

「これがポルチオー子宮口だ。ここを開発すれば、お前の身体は完成する。そうすればもう会議で倒れることはない」

「……そん、な……僕は……ポルチオ、なんて……ッ♡」
「お前は、自分が思っているよりずっと特別な身体を持っている。今から四点同時に責めるから、ちゃんと受け止める」

巖は四点責めを開始した。左手でクリトリスをカップで吸引し続け、口で右の乳首を吸い上げ、右手の人差し指と中指でGスポットを挟み込むように圧迫し、薬指でポルチオをコツコツとノックする。四つの性感帯から同時に電流が走り、玲於の全身が痙攣した。

「ひぎッ……！♡ あゝ、むり……むりむりむり……ッ♡ 四点、いっぺんに……ッ♡ 乳首と、クリと、Gと、ポルチオ……全部、同時……ッ♡」

クリトリスを吸引されるたび尿道の奥がきゅんと疼き、Gスポットを圧迫されるたび膀胱に熱が広がり、ポルチオをノックされるたび内臓の奥で星が散り、乳首を吸われるたび子宮がきゅうっと締まる。膣壁は愛液とオイルでぬめりになり、三本の指をきゅうきゅうと呑み込んだ。玲於の尿道はすでに限界だった。我慢していた尿が、じわりと溢れ出す。

「あ、や……ッ♡ なにか、出……おしっこ、もれ……ッ♡ やだ、やだやだ……ッ♡」
「それは潮とは別だな。尿道が弛緩している。乳首とGスポットとクリトリスを同時に責められて、尿意を抑えられなくなったか」

「やっ……！♡ おもらし、やだ……ッ♡ 大人なのに、おもらし……ッ♡」
「恥じることはない。これも治療の一環だ。尿道も開発すれば、より強い快楽を得られるようになる。ほら、全部出してしまえ」

巖は尿道口に空いた方の手の指を這わせ、かりかりと引っ掻いた。その瞬間、玲於の尿道の締まりが完全に緩み、熱い尿が溢れ出す。じょろじょろとシートを濡らし、愛液と混ざり合って診察台の下に水たまりを作った。失禁の恥辱と同時に、尿道を駆け抜ける熱い解放感が玲於の全身を貫く。

「いっっちゃ……ッ♡ おもらし、とまんな……ッ♡ おしっこ、出ながら……イツ……てる……ッ♡」
「尿道と膣は隣接している。尿道が弛緩すると、膣の締まりも強くなる。今、お前のナカ、指をぎゅうぎゅうに締め上げているぞ。失禁しながら締め付けるとは、なかなか才能がある」

「あゝ、あああゝ……っ！！♡ おしっこ、とまんな、い……ッ♡ それなのに、イゝ、てうッ！！♡ イゝってりゅのにいいゝ！？♡」

尿がまだ止まらない。じょろじょろと溢れ出る生温かい液体が太腿を伝い、玲於の全身が恥辱と快楽でぐちゃぐちゃになりながら、巖の指が四点責めを続ける。失禁の快感と、Gスポットとポルチオの同時攻めで、玲於は二度目の絶頂が迫っているのを感じた。

「ほら、イケ。怖がらなくていい。これは敗北じゃない。お前の身体が、新しい役割を受け入れた証拠だ。素直に感じて偉いな……♡ そのまま私の指に全部預けなさい」

「……ッ、あ……！！ も、無理……ッ！ や、やだ……うゝ、あ……！」
「——イケ」

「あゝ、あああゝ……っ！！♡」

声が途切れ、身体が大きく跳ねた。膣が巖の指をきゅうきゅうと痙攣しながら締め上げ、愛液と尿とは違う熱いものが一気に溢れ出す。ブシャアアッと潮が噴き出し、診察台のシートをぐっしょりと濡らした。尿道を熱いものが駆け抜ける解放感。玲於は自分の意思で何もかもを抑えられなくなったことを、ぼんやりとした頭の片隅で理解した。絶頂の瞬間、視界が真っ白になり、意識が一瞬飛んだ。

「……あ、……は……う……く、ひ……あ……お……ッ、——……あ♡」

玲於はそのままぐったりと脱力した。気絶—ほんの数秒のことだったが、これほど強い絶頂は生まれて初めてだった。目を開けると、天井の蛍光灯がぼんやりと滲んで見える。尿と潮と愛液でぐっしょりと濡れた診察台の上で、自分の身体がまだひくひくと震えている。膣壁が痙攣し、太腿を伝った液体が冷えていく。

「気を失ったか。初めてのポルチオ責めと四点責めで、脳が処理できる快楽の上限を超えたな。これがお前の身体の本当の限界だ。だが、まだ開発は始まったばかりだ」

絶頂の余韻で膣壁がまだひくひくと震えている。玲於が震えながら天井を見つめる中、巖は冷静に手袋を外し、手を洗った。しかしそのスラックスは、治療の間中ずっと張り詰めていた。玲於の失禁と気絶—そのすべてが、彼の陰茎をかつてないほど硬くさせていた。

「これで今日の治療は終わりだ。大事なものは継続だ。明日から毎日、定時後はこの診察室に來い。お前の身体はまだまだ開発し足りない。尿道も、ポルチオも、乳首も、まだ未開発の場所がある。これからすべてを仕上げていく」

第2章 連日の開発 尿道拡張・乳首開発・ポルチオ拡張・連続潮吹き・二穴開発導入

水曜日の定期メンテナンスは、いつの間にか毎日の「治療」に変わっていた。玲於の身体は巖の指と器具によって開発され続ける。

ある夜。診察台の上で、玲於の身体はすでに準備が整っていた。クリトリスは吸引器具のカップで元の倍近くに肥大し、ぷっくりと膨らんでひくひくと脈打っている。乳首は昨日の開発で敏感になり、ブラウスの上からでもわかるほど硬く尖っていた。膣口からは愛液が溢れ、太腿を伝ってシートに染みを作っている。

「今日は新しい場所を開発する。尿道だ。前回、失禁した時に気づいたが、お前の尿道は非常に敏感だ。ここを拡張すれば、より強い快樂が得られる」

巖は細い金属製のブジーを手にとった。先端がわずかに湾曲した、尿道拡張用の医療器具だ。消毒液で清めたそれを、玲於の尿道口にゆっくりと押し当てる。

「尿道は膣のすぐ上にある。Gスポットを裏側から圧迫する形になる。痛みはない。異物感だけだ。リラックスしろ」

「……こわ……でも、やります。治療、ですから」